The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ボランティア研究の射程 ： グループ・ダイナミックスの立場から
Author(s)	渥美, 公秀
Citation	ボランティア学研究. 2000, 1, p. 57-71
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/3475
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

ISSN 1345-9511

『ボランティア学研究』創刊号（2000年）

Journal of Volunteer Studies, vol. 1 (2000)

＜論文＞

ボランティア研究の射程

渥　美　公　秀

－ 国際ボランティア学会 －

ボランティア研究の射程

グループ・ダイナミックスの立場から

渥　美　公　秀

大阪大学人間科学部ボランティア人間科学講座

【要約】

本研究は、ボランティア研究について、グループ・ダイナミックスの枠組みを紹介し、その射程を探ったものである。まず、グループ・ダイナミックスの依拠するメタ理論を紹介し、理論、方法、実践、成果について検討した。続いて、グループ・ダイナミックスがどのようにボランティア研究にアプローチするかを簡単に述べ、最後に、事例として、ボランティアに関して流布しているキーワードを疑うことを試みた。

【キーワード】
ボランティア、ボランティア研究、グループ・ダイナミックス

受稿日　1999年9月9日
受理日　2000年1月12日

はじめに

阪神大震災を契機として、ボランティア活動が、人々の関心の一部となり、ボランティア活動に参加することは取りたてて異質なことではなくなった。しかし、いかなる理論的視座に立ってボランティアを研究するかということになると、この問い自体、いまだ新しく、ボランティア研究の射程は定かではない。確かに、ボランティア活動は実践に尽きる。しかし、実践に尽きるということは、理論的な言説と一線を画すということでは、決して、ない。むしろ、その正反対である。ここに言う実践とは、Lewin(1951)が「よい理論ほど実践的なものはない」と語った時の実践であり、理論と不可分の関係にある実践である。例えば、ボランティアを特徴づける際に自発性・無償性・社会性といったキーワードを無反省に用いることによってボランティアを理解したことになるだろうか。ボランティアなる社会現象に対して、何らかの施策や制度を変容させることでその現象を社会に位置づけることができるのだろうか。今こそ、ボランティアに関する研究が必要である。

本稿では、著者が依拠するグループ・ダイナミックスの立場から、ボランティア研究の枠組みを示し、その射程を探ってみたい。まず、グループ・ダイナミックスの枠組みを概説する（第1節）。次に、グループ・ダイナミックスの立場からボランティア研究の射程を考察する（第2節）。最後に、ボランティア研究の射程内から、個人ボランティアについて問うべき問いの一例を紹介する（第3節）。

第1節　グループ・ダイナミックスの枠組み

グループダイナミックスは、集団（集合体）を1つの全体として捉え、その全体的性質（集合性）のダイナミックスを明らかにするとともに、集合性と、集合体の成員に開ける世界との動的相互規定関係を扱う学問である。グループ・ダイナミックスは、「研究者と研究対象との間に一線を画すことはできない」ということを公理とし、「よい理論ほど実践的なものはない」という姿勢を堅持しながら研究を進めていく。その研究スタイルは、いわば「アクティブ・フィールドワーク」とでも形容できましょう。

まず、グループ・ダイナミックスの枠組みを提示しておこう（図1）。社会的構成主義というメタ理論を土俵として、理論、方法、実践、成果が不可分に展開している。それぞれについて 、杉万（1998、1999)を中心に渥美(1999a,b)、Atsumi, Kato, Suzuki, & Watanabe (1999)を参考にしながら概説する。

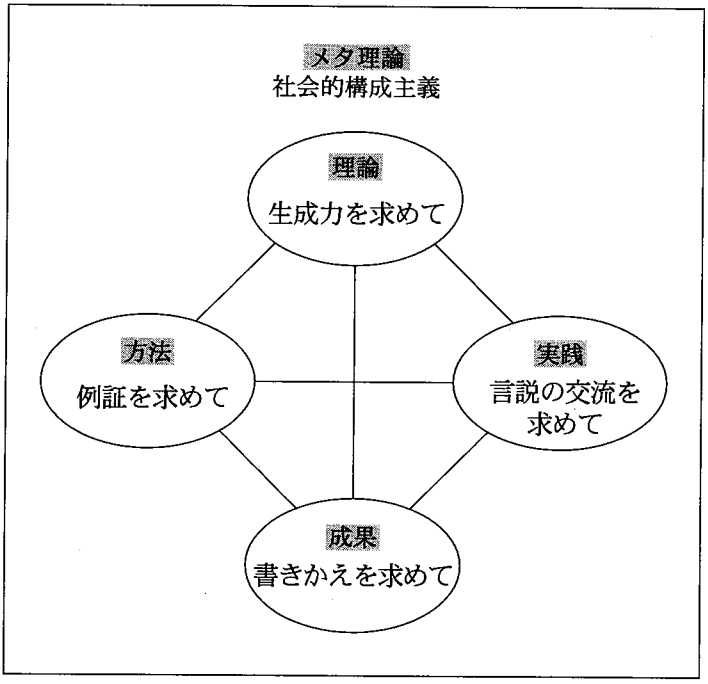

図1　グループ・ダイナミックの枠組み

メタ理論　グループ・ダイナミックスは、メタ理論として、社会的構成主義(social constructionism[1])の立場を採り、従来の主観－客観図式と訣別する。すなわち、グループ・ダイナミックスは、世界を社会的に構成された産物として理解する。これまでの科学は、一方に外在的に実在する世界（外界）を措定し、他方に外界が投影され情報処理が行われる内界を対置し、内界（主観）－外界（客観）二項対立図式を採用してきた。しかし、今世紀に入って主観－客観図式は科学の行き過ぎや行き詰まりと相俟って省察を迫られてきた。現在では、哲学の分野で主観－客観図式を根本的に超克する試み（例えば、廣松, 1982）が成功しているし、臨床心理学の領域でも主観－客観図式を超えた療法が事例とともに知られるようになっている（例えば、McNamee & Gergen, 1992）。グループ・ダイナミックスに近い社会心理学の分野でも、ヨーロッパからMoscovici (1984)による社会的表象理論が提唱され、アメリカからは、Gergen (1985, 1989)による社会心理学批判が相次ぎ、今や主観－客観図式を超克しようとする試みは１つの潮流となりつつある。社会心理学

における最近の成果としては、Gergen (1994, 1999)による論理実証主義心理学の批判とそれに代わる社会的構成主義による社会心理学の建て直しの提唱が強力である。これら諸分野での試みは、主観－客観図式をとらないそれぞれ強調点を異にするとしても、広義の社会的構成主義への動きとして一括することができよう。

グループ・ダイナミックスは、このような関連諸分野での動きと連動して、社会的構成主義をそのメタ理論として採用する。その結果、グループ・ダイナミックスは、客観的事実についての理論を実証的方法で検討するという論理実証主義的研究スタイルを棄却する。理論の価値は、実在すると想定される客観的事実を描写することにあるのではないと考える。そして、研究は価値中立的ではありえず、研究の成果としての知は、時代を超えて蓄積されたりはしないという立場を採る。

理　論　グループ・ダイナミックスでは、理論、方法、実践も自ずと従来の論理実証主義を基盤とした理論・方法・実践とは異なる。従来は、理論によって現実のベールを剥がし、できるだけ真実に近い事柄を明らかにしようとしてきた。理論は、外在的現実を覆うベールをどれだけ剥がすことができるかという基準で評価され、外在的現実との照合が上手く進む理論がよい理論とされた。しかし、グループ・ダイナミックスでは、理論のもつ生成的能力（Gergen, 1994）によって理論を評価する。生成的能力とは、社会の前提そのものを疑い、現代の社会生活そのものを疑い、「当たり前」とされていることを疑い、そして、その結果、社会の中に新鮮な代替案を生み出す能力のことである。グループ・ダイナミックスにおいて「よい理論ほど実践的なものはない」と言う際の「よい理論」とは、生成的能力をもった理論である。優れた理論とは、外在的現実（なるもの）との照合によって成立するのではなく、「表現力を与える」事例をもって例証され、新たなる抽象的な言説を生成する理論でなければならない。

理論を生成的能力で評価するので、理論をもとにした予測や制御はできなくなるのではないかという危惧があるかもしれない。グループ・ダイナミックスでは、予測や制御といっても、外在的に措定された現実を予測したり、制御したりしようとするのではない。グループ・ダイナミックスの立場に立つ者は、予め予測したい結果や、制御の結果得たいと考える事態を構想し（その内容を時には巧妙に隠蔽しながら）、先取りされた予測・制御結果に向けて、現在を、いや、過去をも構成していくのである。言い換えれば、実践の現場においてこうあってほしいという価値観が先に存在する。そして、その

目標に向かって現実を様々な言説を通して社会的に構成するのである[2]。夢は一人で見ているうちは夢であるが、二人で見れば現実となる。

方　法　従来は、外在的に存在する世界が措定され、理論と外在的世界との照合を首尾よく行うことが目的であったから、これを可能にする方法を用いる必要があった。すなわち、実験に代表されるような論理実証主義の方法である。しかし、グループ・ダイナミックスでは、社会的構成主義の立場に立って、理論の生成的能力に注目するのであるから、理論の例証となる表現力をもった事例を提示できるような方法が必要となる。そのためには当事者の構成された現実にどっぷりとつかりながら、“かつ同時に”、その現実から離れて研究者の構成された現実に自らをずらし、相異なる構成的現実からこそ見えてくる世界を把握することが必要となる。

具体的な方法としては、参与観察が主派となる。アンケート調査や実験的方法は、理論の「検証」として用いられる限りにおいてこれを棄却し、理論の「例証」を提示する限りにおいてこれを採用する。また文献精査など、いわゆる研究室内において行う研究活動も、これが現場に出かけないからといって批判するということはない。参与観察を中心とし、常に現場と連絡を取りながら研究を進める場合が多いとしても、なにも全ての研究者がこのように研究活動を進める必要はない。参与観察を行う者と、その他の方法を用いて研究を進める者とが連携をとっていればそれでよい。

参与観察では、研究者の構成された世界と当事者の構成された世界とがぶつかりあう間（はざま）において展開する言説のせめぎあいが生じる。研究者は、その言説の交流を記述していく。記述に当たっては、最近、親切な入門書（e.g., Emerson, Fretz, & Shaw, 1995; Hammersley, 1992; 佐藤、1992）も出ている。ここでは、いわゆるフィールドノーツ万能主義には陥らないように記述することの重要性[3]を示唆するに留めておこう。

実　践　グループ・ダイナミックスにおける実践とは、研究者と当事者の言説が互いに干渉し、変貌を遂げる営みのことである。研究者も現場の当事者もそれぞれの社会的に構成された世界に住む。もちろん、研究者の世界と当事者の世界は異なる場合が多い。ただし、研究者が何らかの基底的・原理的な知識を独占し、研究者にとって外在する当事者の世界に対峙するのではない。また、当事者だけが真なる現場を知っていて、研究者は当事者にとって外在的に関与するのでもない。互いに相異なる世界に住みながら、互いの言説を交差させ、互いの世界に変化をもたらす。実は、この変化が実践なのである。

グループ・ダイナミックスが「よい理論ほど実践的なものはない」というのは、「生成力のある理論であるほど、変化＝実践が生じる」という意味である。したがって、グループ・ダイナミックスの理論や方法、さらには、研究成果としてのエスノグラフィーは、実践と相俟って不断に改訂されていくことになる。

成　果　研究成果としての記述は、様々な形態をとる。理論として抽象的な言説が語られ、実践として具体的な言説が語られる。淡々とした記述から、小説のように人々の生きざまを鏤々綴っていくという形態もある。記述されたものは、エスノグラフィーと呼ばれる場合が多い。ただし、インフォーマントからできるだけ情報を入手し、その情報に基づいて客観的に記述するというスタイルではない。このようなスタイルでは、インフォーマントが“真なる”現場を独占的に知っているという構成を免れないからだ。したがって、グループ・ダイナミックスの記述は、著者自身が織り込まれたエスノグラフィーとなる。グループ・ダイナミックスの研究成果は、論文というより作品と呼んだ方がふさわしい形態をとる。作品としてのエスノグラフィーは、常に改訂作業に開かれている。研究は実践と不可分だからである。

エスノグラフィーは、改訂作業に開かれているだけではなく、一般化に対しても開かれている（杉万、1999)。エスノグラフィーは、抽象度を上げることによって一般性を確保し、より広い領域での実践と結びつく。エスノグラフィーは、研究者と当事者とで織り成す言説であるが、通常、時間的にも空間的にも局所的であり特個的である。エスノグラフィーは、そこに含まれる理論が真理を突いているから一般性を持つのではない。また当事者の経験が活き活きと綴られているから一般性を持つわけでもない。抽象化された言説＝理論であってこそ、時間的・空間的に離れた世界にも影響する。このようにして導かれた研究結果＝協働的な実践の結果は、現場とは直接に関係をもたない人々の解釈共同体に流れ込む。そこで真実味・迫真性(Bruner, 1986)をもって迎えられれば、それをもって生成力のある研究成果となるのである。

ところで、エスノグラフィーとその基盤となるフィールドワークに関する議論は、最近とみに高まりを見せている。例えば、Maanen (1988)は、フィールドワークをその核心において、1つの文化と折り合いをつけていく長い社会的なプロセスであるとし、エスノグラフィーを、「ある1つの文化の（あるいは、ある1つの文化の中から選択された諸相の）記述による再現」であると定義する。エスノグラフィーには、①経験に基づいて営まれる、②政治的にも介入されている、③自らが出発点とした特定の伝統や規律によっても決

定される、④使用する作法は歴史的に位置づけられ時代によって変化する、といった制約があることは言うまでもない。文化あるいは文化的実践は、「書くこと」そのものを決定するし、同時に、「書くこと」によって創造されるという Maanen の指摘は正しい。

Maanenは、このような議論を展開した上で、エスノグラフィーの３つの類型を紹介している。まず、写実的物語は、著者が知っていること（少なくとも知っていると思っていること）を題材として取り上げ、どのようにしてその知識を得たかということは明示せずに、フィールドが写実される。被観察者の生活について直接報告する第三者たる筆記者の声がそこにあり、テクストのほとんどの部分から、ほぼ完全に著者の存在が消える。次に、告白体の物語は、ある知識をもっている著者自身を題材として取り上げ、書き手がフィールドワークの結果何を知ったかは、概して避けて通る。これは、写実的な物語と対照をなし、高度に個人的なスタイルと、書き手自身のために書き手が自らに与える大きな権限があることが特徴である。告白体の物語は、人格化された権威＝著者性（authority)が必要である。最後に、印象派の物語は、名前の通り、19世紀末から今世紀初頭の西洋近代絵画における印象派を意識した命名である。印象派の絵画は、刻一刻と変化する世俗的なある光景をある特別な一瞬のうちに捉えようとする。非常に個人的なものの見方が伝わるが、あくまで具象的である。さらに、絵を見るものは、画家が見ているものと完全に一致するとされる。この印象派の手法・スタイルを物語に持ち込むわけである。このスタイルでは、フィールドワークの経験の広範囲にわたる回想を“驚くべき物語”の形で提示する。読者に要求されるのは、フィールドワーカーとともに物語を生き直すことである。

注意すべきことは、上記の３つのスタイルは、すべて同時に存在しているということである。つまり、写実から、告白に至り、ついには印象派になったということではない。それぞれのスタイルが合わさってエスノグラフィーができているということである。

もちろん、エスノグラフィーに関しては、さらに数多くの問題を論じる必要がある。例えば、エスノグラフィーは誰のために書くのか、どの程度のフィクションが許されるのか、エスノグラフィーの評価基準は何かといった問題である（Atsumi, et al., 1999)。ただし、ここではこれ以上深く立ち入ることはせず、問題の所在を指摘するに留めておきたい。

要約しよう。グループ・ダイナミックスは、社会的構成主義というメタ理論を採用し、生成力のある理論を参与観察という方法によって例証しながら、現場との言説の交流を進めて行く。現場に持ち込んだ言説が当事者の活動に

変化をもたらす場合もある。当事者との交流によって理論的言説が修正を迫られることもある。現場との交流によって理論が絶えず改訂されて行くプロセスこそがグループ・ダイナミックスの研究であり、実践と呼ばれるプロセスである。

第2節　ボランティア研究の射程

グループ・ダイナミックスが、時間的・空間的に広がった様々な集合体を研究の対象としうることは前節から明らかであろう。グループ・ダイナミックスに立脚してボランティアを研究する場合には、ボランティアという言葉（その否定形も含む）を介して展開する様々な活動が研究の射程に入る。

ボランティア研究に携わる研究者は、社会的に構成されたボランティアについて、生成力のある理論を紡ぎだすことを狙う。そのために、研究者は、ボランティア活動の現場に参与観察を行う場合がある。

ボランティア活動の現場にいる研究者は、ボランティア、あるいは、ボランティア団体の構成員としてそこに構成される世界に住む。研究室に戻った時、研究者は、研究者として構成される世界に住む。ただし、両者が分離することはない。ここで、研究者が現場と研究室との間で視点の移動をしているわけではないことに注意したい。研究者は、どちらの世界にも巻き込まれ、寄り添っているのであって、そこには、研究者としての「わたしの」視点しか存在しない。換言すれば、研究者は、その時そこで、局所的に活動し、全体としてどのような位置を占めているのかは、読み切れないまま、ただひたすら活動している。

活動を通して、当事者としての言説と研究者としての言説が出会う。具体的には、ボランティアの当事者が構成する世界に立たされて研究者としてどのような言説が吐けるか、研究者の構成する世界に立って、ボランティアとして（研究者なりに）どのような言説が吐けるかが試される。その際、研究者がボランティア活動の当事者に媚びるのは見苦しいのと同様に、ボランティアが研究者におもねる必要は全くない。

以上のプロセスについて、研究者自身を含んだエスノグラフィーが中間報告として提示される。エスノグラフィーは、当事者（ボランティア）によって、研究者によって、さらには、第三者によって改訂を迫られる。こうして、理論が、より生成力をもつように洗練される。そしてまた、研究者は、研究室に、そして、ボランティア活動の現場に帰っていく。

このような循環過程を通して、ボランティア研究の射程が縁取りされていくのである。射程内の研究課題を例示すれば、ボランティアの歴史的・社会

的背景、ボランティアを含む集団の振る舞い、ボランティア個人に開ける世界、など容易に列挙することができよう。筆者と共同研究者らは、ボランティア研究の射程の中で、これまで阪神大震災の避難所[4]やボランティア組織[5]の研究、アメリカの災害ボランティア組織[6]の研究、および、コミュニティにおけるボランティア活動[7]に関する研究を実施してきた。理論研究としてもボランティアを含む社会の行方について試論[8]を開始している。次節では、最近取り組んでいる問題の１つを取り上げ、中間報告的に紹介する。

第３節　ボランティア研究の射程からの問いかけ-ボランティアのキーワード再考

本節では、ボランティアとは何かというあからさまな問いに対して頻繁に挙げられるキーワードを疑い、考察の糸口を提示する。これは、Gergen (1994)の指摘する手法のうち、アンチテーゼを探求しながら、生成的理論を構築する試みである。

ボランティアのキーワード[9]

昨今のNPO / NGOを近代社会論、社会運動論に対応づけながら論じた三上(1998)は、最近のボランティア活動に「やりたい時にやりたい事をすればよい」という特徴が見られることを指摘し、ボランティアは、「ただ活動している」と述べている。実際、ボランティア活動をしている人に、「なぜボランティアをするのか」といった問いを発すると、「ただボランティアの現場があったから」という答が返ってくる場合がある。例えば（中田・内海・渥美・早瀬・大熊,1998)。当事者として当然の答である。

ところが、ボランティアを特徴づける際には、「ただ活動している」あるいは「やりたい時にやりたい事を」といった側面が抜け落ちているような言説が見られる。例えば、ボランティアの特性として「自発性」、「無償性」、「社会性」といった言葉が使われる場合がある。これらの言葉を無反省に使う時、その背後には、暗黙かつ自明の前提として、近代社会の価値や道徳性といった常識が潜んでいるように思われる。「ボランティアは、自発的に、無償で社会的に活動する」といった表現の中に、新しい市民社会を担う主体（の１つ）として自律した個人なる“理想像”を夢見たり、自発的に社会に貢献すべきであるとの“道徳観”を持ち込む姿勢が見え隠れする。そこに危険をも感じ取るのは、筆者だけではない（例えば、中野, 1999)。そもそも、これらのキーワードを文字どおりにとれば、「ただ活動している」とするボランティア像とはかけ離れているし、実際、ボランティア活動の場に参加している実感ともずれている。以下では、このずれの感覚を手がかりに各々の言葉を疑っ

てみよう。

自発性：「みずから進んで行なうこと」と「自然に起こること」という似て非なる意味がある。ボランティアの自発性という場合、通常は、「自己の内部の原因・力によって思考・行為がなされること」として前者を指すようである。しかし、ボランティアの自発性という場合に確固とした“自己”なるものを(勝手に)前提し、そこから発する意志によって参加するとするには無理がある。木村（1988）が考察しているように、「自」という字には、本人の意志の含まれる「みずから」という訓だけではなく、本人の意志を含まない「おのずから」という訓がある。ボランティア活動の背後には、自他分離以前から発する「おのずから」がありはしないか。ボランティアの現場に立つ人物が「ほっとかれへん」と表現していること（早瀬, 1996）も、このことを示している。

無償性：無償の対語は、有償である。無償という言葉は、ボランティアを有償の否定として捉えている場合が多いように思う。言い換えれば、交換可能性（労働とその対価）という平面＝市場論理の平面での議論になっている。しかし、ボランティアは、交換とは端的に無縁ではなかろうか。ボランティアは、交換可能性の平面とは無縁の平面[10]に展開する。言うまでもなく、交換が成立するためには、予め暗黙かつ自明の前提が共有されていること、すなわち、同じ超越性の範域に含まれていることが必要である（大澤、1993)。しかし、渥美（1998a,c, 1999）が論じているように、<超越性>は生生流転し、ボランティアは既存の範域から絶えず逸脱する。したがって、ボランティアとボランティア活動の受け手との関係は、交換ではない。実際、日本海重油流出事故の際、「ただ(対価なし)であるから参加している」と述べたボランティアがいた。彼の言葉は、「ただ（対価なし）だけれども参加している」ではない。ここには、交換可能性がないことにこそ活動の意義を見ている姿がある。

社会性：ボランティア活動は、何らかの形で他人と関わり、“一人遊び”ではない。これは当然のことであろう。しかし、このことをもって社会性とする議論は、ついつい、“従って”ボランティアが新しい市民社会の担い手になる可能性があるとか、“それゆえに”新しい公共空間が創出されるといった議論につながる場合がある。しかし、「ただ活動している」ボランティアは、市民社会や公共性を“目標”とした活動に携わっているのだろうか。そもそも社会性は、あらゆる事柄の前提でもある。

では、「ただ活動している」というボランティアが、なぜ大衆化していくのだろうか。もはや詳論する紙幅は残されていないが、近代社会の黄昏という

社会全体の背景（e.g., 21 世紀の関西を考える会, 1997）を射程に入れて考えるならば、個々のボランティアには、有用性の彼方に開ける「歓び」の世界が展望される。ボランティアは、有用性を越えた彼岸への扉が開かれることと関係があろう。すなわち、公共性のためとか、経済効果が上がるとかいったことに対する何らかの有用性を備えた手段としてではなく、それ自体として生の充溢であり、歓喜であるような領野[11]がボランティア一人一人に開ける[12]。この領野において、「かけがえのなさ」を感じる（1つの）活動がボランティア活動である。ボランティアには、近代社会の価値を超えた新しい生のあり方が垣間見えるように思われる。

参考文献

渥美公秀 (1995). ボランティアを組織するボランティア - 阪神・淡路大震災における西宮ボランティアネットワーク（NVN）の事例 - *Business Insight 10, 108-125.*

渥美公秀 (1996) これからの災害救援 ：被災者・救援者の集合性に基づいた集合性再構築支援　城仁士・杉万俊夫・渥美公秀・小花和尚子 編著　*心理学者の見た阪神大震災 - こころのケアとボランティア*　ナカニシヤ出版 192-216

渥美公秀 (1997) 広域ボランティア組織の長期的展開-西宮ボランティアネットワークから日本災害救援ボランティアネットワークへ　神戸大学震災研究会編　*阪神大震災研究 2　被災の苦難とボランティア* 神戸新聞出版センター 287-300

渥美公秀 (1998a) ボランティア社会の行方　*組織科学*, 31,3, 27-35.

渥美公秀 (1998b) 災害救援システムとボランティア活動の将来展望　*都市政策*, 92, 17-28.

渥美公秀 (1998c) ボランティア社会に向けて:理論的準備（1）*日本グループ・ダイナミックス学会第 46 回大会発表論文集*

渥美公秀 (1999a) グループ・ダイナミックスとボランティア研究　大阪大学人間科学部紀要 ,25, 259-275.

渥美公秀 (1999b) ボランティア社会に向けて -（2）承前：ボランティア研究の射程　*日本グループ・ダイナミックス学会第 47 回大会発表論文集*

Atsumi, T., Kato, K., Suzuki, I, & Watanabe, T. (1999). Fieldwork & Group Dynamics: Framework, Fieldwork, and Network. The 3rd Conference of Asian Social Psychology Association. Taipei, Taiwan.

渥美公秀・加藤謙介・鈴木勇・渡邊としえ (印刷中) 災害ボランティア組織

の活動展開：日本災害救援ボランティアネットワークの５年　神戸大学震災研究会編　*阪神大震災研究、大震災５年の歳月*　神戸新聞出版センター
渥美公秀・森永壽（1996）NVN - 成立過程とその後の展望　朝日新聞社編　*阪神・淡路大震災誌*　朝日新聞社 415-421
渥美公秀・杉万俊夫・森永壽・八ッ塚一郎（1995). 阪神大震災におけるボランティア組織に関する参与観察研究　*実験社会心理学研究* 35, 2, 218-231.
渥美公秀・渡邊としえ（1995）避難所の形成と展開 - 西宮市安井小学校　神戸大学震災研究会編　*阪神大震災研究Ⅰ　大震災100日の軌跡* - 被災、避難、困窮、そして復興へ - 神戸新聞出版センター 82-90
Atsumi, T., Watanabe, T., & NVNAD (1998). The History of the NVNAD. *The 7th Annual VOAD Leadership Conference.* Atlantic City, NJ.
Battaille, G. (1949). La part maudite. Paris: Les Editions de Minuit. 生田耕作 訳 *呪われた部分* 二見書房 1973.
Bruner, J. (1986). Actual minds, possible worlds. Cambridge: Harvard Univ. Press. 田中一彦訳　可能世界の心理 みすず書房 1998.
Emerson, R.M., Fretz, R.I., & Shaw, L.L. (1995) Writing ehnographic fieldnotes. Chicago : University of Chicago Press. 佐藤郁哉・好井裕明・山田富秋　訳 方法としてのフィールドノート　新曜社　1998.
Gergen, K.J. (1985). The social constructionist movement in modern psychology. American Psychologist, 40, 266-275.
Gergen, K.J. (1989). Social psychology and the wrong revolution. European Journal of Social Psychology, 19, 731-732.
Gergen, K.J. (1994). Toward transformation in social knowledge 2nd ed. London: Sage. 杉万俊夫・矢守克也・渥美公秀 監訳 もう一つの社会心理学 ナカニシヤ出版 1998.
Gergen, K.J. (1999). An invitation to social construction. London: Sage.
Hammersley, M. (1992). What's wrong with ethnography? London: Routledge.
早瀬昇（1996）大阪大学人間科学部公開講義
廣松渉（1982）存在と意味 第一巻 岩波書店
木村敏（1988). あいだ 弘文堂
Lewin, K. (1951). *Field theory in social science: Selected theoretical papers.* New York: Harper & Brothers. 猪股佐登留 訳 社会科学における場の理論 誠信書房 1956
Maanen, J.V. (1988). Tales from the field: On writing ethnography. Chicago: University of Chicago Press. 森川渉　訳　フィールドワークの物語：エスノグラフィー

の文章作法　現代書館　1999.

McNamee, S. & Gergen, K.J. (1992). *Therapy as social construction.* New York: Sage. 野口裕一・野村直樹　訳 1997 ナラティブ・セラピー ：社会構成主義の実践 金剛出版.

三上剛史 (1998). 新たな公共空間　社会学評論, 48, 453-473.

見田宗介 (1996). *現代社会の理論 - 情報化・消費化社会の現在と未来*　岩波新書

Moscovici, S. (1984). The phenomenon of social representations. In R. Farr & S. Moscovici (Eds.). *Social representations.* Cambridge: Cambridge University Press.

中野敏夫 (1999) ボランティア動員型市民社会論の陥穽　現代思想, 27(5), 72-93.

中田武仁・内海成治・渥美公秀・早瀬昇・大熊由紀子(1998) 国際協力とボランティア *大阪大学人間科学部紀要*, 83-106.

日本災害救援ボランティアネットワーク (1998) *NVNAD-News* Vol.19.

21世紀の関西を考える会 (1997). *到来しつつあるボランティア社会を前提とした災害救援システムの実現に向けて*

大澤真幸 (1993). *身体の比較社会学 I*　勁草書房

佐藤郁哉 (1992) フィールドワーク　新曜社

杉万俊夫 (1998). グループ・ダイナミックスの方法論 ー「もう一つの科学」に向けて　*日本グループ・ダイナミックス学会第46回大会発表論文集*

杉万俊夫 (1999). 実践としてのグループ・ダイナミックス　*実験社会心理学研究*, 38, 202-204.

杉万俊夫・渥美公秀・永田素彦・渡邊としえ　(1995) 阪神大震災における避難所の組織化プロセス　*実験社会心理学研究*, 35, 2, 207-217.

鈴木勇・渥美公秀 (1998) アメリカにおける災害ボランティア組織の変容過程 - ノースリッジ地震の事例　*日本グループ・ダイナミックス学会第46回大会発表論文集*

渡邊としえ・渥美公秀 (1998) 阪神大震災における地域変容過程のフィールド・ワーク - 複合的変容の可能性　*日本グループ・ダイナミックス学会第46回大会発表論文集*

Watanabe, T., Atsumi, T., Teramoto, H., & Komura, T. (1999). Preventing disaster without saying disaster prevention: A case study "Workshop for Rediscovery of My Home Town." The 6th Japan-US Workshop for Urban Disaster Kobe.

【注】

本研究は、渥美（1999a）を大幅に加筆修正したものである。

1　ここでは、Gergen(1994, 1999)に依拠して、この用語を用いる。

2　日本グループダイナミックス学会第46回大会（1998）におけるワークショップ「グループ・ダイナミックスの方法論 - “もう一つの科学”に向けて（企画者：杉万俊夫）」で交わされた議論が参考になったことを明記しておきたい。

3　一般に、研究者は、現場で経験した事柄を記録する。記録したメモは、フィールドノートと呼ばれる。フィールドノートや現場で収集した資料などをもとに、研究者の印象や研究の展望などを加えて構成したものは、フィールドノーツと呼ばれる。エスノグラフィー（「成果」の項参照）を書く際には、フィールドノーツを基礎資料とする。ただし、フィールドノーツに拘束される必要はないと考える。例えば、フィールドノーツに記されている事柄を揺るぎない事実（客観的現実の記録）だとし、記されていないことは研究者の感想（主観的印象）にすぎないといった捉え方は、社会的構成主義に立つグループ・ダイナミックスでは採用しない。

4　例えば、渥美・渡邊（1995), 杉万・渥美・永田・渡邊（1995）

5　例えば、渥美（1995, 1996, 1997), 渥美・加藤・鈴木・渡邊（2000), 渥美・森（1996), 渥美・杉万・森・八ッ塚（1995), Atsumi, Watanabe, & NVNAD（1998）

6　例えば、鈴木・渥美（1998）

7　例えば、渡邊・渥美（1998), Watanabe, Atsumi, Teramoto, & Komura（1999）

8　例えば、渥美（1998a, b）

9　渥美(1998c)をもとに加筆した。

10　例えば、ある活動が何かの役に立つので、それに応じた対価を想定するというように、交換によって価値が生じる平面ではなく、ある活動がそれ自体で意義をもつ平面のこと。

11　Battile（1949）参照

12　見田(1996)は、情報化・消費化された現代社会を、情報、消費に関する原理的な問いから考察し、同様の見解を提示している。

Volunteer Study and its Range : An Approach from Group Dynamics

Tomohide ATSUMI

The present study discusses possibilities for group dynamics to investigate volunteer activities and its range. First, I introduce the framework of group dynamics based on social constructionism, under which the significance of theory, method, and practice is deliberated. Second, discussion brings procedures of group dynamics approach to volunteer studies into focus. Finally, the approach is exemplified by a study throwing doubt upon circulated keywords of volunteers in order to examine the nature of life-world emerged to individual volunteers.

Keywords :
volunteer, volunteer study, group dynamics